

機関番号：32527

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ~ 2010

課題番号：21730642

研究課題名 (和文) 異年齢保育形態によるインクルージョン保育の展開に関する実証的研究

研究課題名 (英文) A empirical study conducted on inclusive child-care practice in multiage classroom

研究代表者

広瀬 由紀 (HIROSE YUKI)

植草学園大学・発達教育学部・講師

研究者番号：00425357

研究成果の概要 (和文)：異年齢保育という保育形態が、障害のある子やいわゆる気になる子を含めた保育の展開に、多くの影響を与えているという仮説について、質問紙調査ならびにフィールドワークから検証を行った。その結果、保育内容の中にも、そしてそれを展開する保育士の意識の中にも、障害のある子やいわゆる気になる子も含めみんなが違うという、いわゆるインクルージョンの考え方が前提としてあることが確認できた。

研究成果の概要 (英文)：This pursuit conducts one's verification activities that multiage classrooms have many effects on child-care practice inclusive of handicapped children and "anxious" children. In the result, child-care substance and child minder's feeling are premised on the inclusive attitude that all the children are different.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	600,000	180,000	780,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,300,000	390,000	1,690,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教育学

キーワード：インクルージョン

1. 研究開始当初の背景

近年、幼稚園や保育所において、障害のある子どもや医学的な診断のないいわゆる「気になる」子どもが多く在籍している。すなわち、「統合保育」が多く行われ、特別な教育的支援を要する子どもたちに対する「適切な対応」の検討が求められている。

「適切な対応」を検討する際、多くの研究では、子どもたちの「違い」に対して支援の方法を探るなど「主流化(=メインストリーミング)」を目的とした検討が行われている。

一方、本研究では、「インクルージョン」の視点から「障害の有無にかかわらず、共に生き、共に育つことを目的としそのための方法と配慮」の質を追求する立場から、在籍するすべての子どもに応じた保育計画の立案および保育内容の展開について、調査ならびに検証することを考えた。

そこで、昭和52年から市として障害児保育に取り組み、また時期をほぼ同じくして3歳以上児について、保育形態を異年齢の縦割りクラスとし、双方の実践を積み重ねている

千葉市の公立保育所に着目した。同市の保育経験者からは、異年齢保育へ移行したことにより、子どもには「異年齢集団の形成」「遊びの広がり」「障害のある子も含めた保育展開」、職員については、「どのクラスでも受け入れができるようになった」「人間関係が円滑になった」「発達段階で子どもを捉えることができるようになった」などの変化を挙げているが、裏付けできるデータ等は示されていない。そこで、異年齢の縦割り保育という保育形態が、保育の計画の立案や保育内容の展開、さらには保育士の考え方等に、インクルージョン保育の展開という観点から、どのような影響を及ぼしているかについて、検討が必要であると考えられる。

2. 研究の目的

本研究は、千葉市の公立保育所におけるインクルージョン保育の展開と、異年齢の縦割りクラス編成が、どのような互いに影響を及ぼしているのかについて、「保育計画について」「保育内容について」「保育士の意識について」の3つの視点により立証することを目的とする。

3. 研究の方法

以下の手順により研究を進めた。

(平成 21 年度)

- ・千葉市保育課への研究協力依頼
- ・保育の展開に関するフィールドワーク (市内 1 カ所の保育所へ継続的に 1 年間)
- ・異年齢保育に携わる保育士への意識調査
- ・配慮を要する子を含めた異年齢保育の展開に関するエピソード調査

(平成 22 年度)

- ・保育の展開に関するフィールドワーク (規模の異なる 3 カ所の保育所に対して、継続的に 1 年間)
- ・保育者の意識に関するインタビュー調査 (フィールドワークにおいて実施)
- ・平成 22 年度に実施したエピソード調査の集計・分析
- ・保育計画に関する調査 (フィールドワーク協力保育所を対象として実施)

4. 研究成果

(1) 保育計画について

千葉市の月ごとの保育計画は、定形のものではなく、保育所ごとに書きやすい書式になっている。しかし、記載されている内容はほぼ共通しており、「クラス運営 (異年齢保育)」「年齢別活動」におけるねらいや内容、さらに「クラスで個別配慮を要する子への対応」となっていた。なお、「クラスで個別配慮を要する子」というのは、特別支援教育で用いられている発達障害の可能性も示唆される

ようないわゆる「気になる子」という狭義ではなく、家庭環境等を含めた広義で用いられている。実際に保育計画を見ると、いわゆる気になる子が、毎月の個別配慮を要する子として出てくることはなかった。

また、障害児枠で入所の子どもについては、月ごとの計画にも、現状と対応を記すが、市で共通した個別の記録様式があり、1 年間の 4 期に分け、ねらいと現状、次の期への課題を記すこととなっている。

実際に記されている保育計画の内容を見たり、保育士からのインタビューを行ったりした結果からは、月ごとの計画段階においては、その時期、子ども全体の様子を考慮して、様々な活動を予測していることがうかがえた。

(2) 保育内容について

実際の保育内容については、フィールドワークやエピソード調査を行ったなかで、多くの知見を得ることができた。以下、異年齢保育で展開することが、障害のある子やいわゆる気になる子にとっても、よりよい影響を与えていると考察できる主な 3 点についてまとめる。

① 活動の豊富さ

1 つのクラスでは、すでに環境として準備されているもの、子どもが要求したもの、保育士が提案するもの、などを含め、4～5 つの活動が進められていた。そして、子どもたちは、自分に合った活動を選び、遊ぶ姿が多く見られた。また、他のクラスに遊びたいものがあり、互いのクラスの許可を得られれば、遊びたいクラスへ行き、遊ぶ姿も見られた。障害のある子やいわゆる気になる子にとっても例外ではなく、活動の選択の幅が広いいため、自分がやってみたいと思える活動を見つけやすいということが、フィールドワークから示唆された。

② 多様な人との関わり

異年齢の子どもたちが一緒にいることで、どの子どもも、年齢に捉われないさまざまな集団を形成することが、フィールドワークで確認できた。障害のある子や気になる子にとっても同様に、自分の居心地のよい相手と、自分が遊びたいと思う遊びを展開している姿が確認できた。一方で、まだ人と関わる力が弱い子どもについては、担当の保育士 (加配もしくは担任) が、その子の難しいところを支えながら、周囲の子には、その場面でのその子の難しさをわかりやすい言葉で説明している場面が見られた。また、脳性マヒなど目に見える障害のある子の場合、年上児や同年齢の子どもが、積極的に世話をしたり、代替で入る保育士等に、当該幼児が言っていることを代弁したりする姿も確認できた。

また、エピソード調査でも、子どもたちどうしのさりげない支え合いが、保育場面の随所で行われており、異年齢保育の中で、いろいろな子が育ち合うことのよさとして、多くの保育士が実感としていることが示唆された。

③周囲の子どもたちの受け止め方

異年齢で集団を形成するということは、発達過程に同年齢以上の幅がある子どもたちが集い、共に過ごすということである。みんなが違うという前提で、生活が進められているため、そこで過ごす障害のある子やいわゆる気になる子が目立ちにくい状況になりやすいと考えられる。目立ちにくいことで、その子のマイナス面を子どもたちが意識することが少なく、同じクラスの仲間として、対等な立場で対峙する子どもの姿を、フィールドワークで確認できた。

また、子どもたちは、多様性を受容するところから始まっていることと関連し、障害のある子やいわゆる気になる子に対しても、彼らの得意な面については認めている子どもが多く見られた。

(3)保育士の意識について

保育士の意識に関する質問紙調査の結果からは、先行文献で示唆されている異年齢保育を受けている子どもの教育的意義について、保育者自身も経験的に同様の意義を感じていることが明らかとなった。また、異年齢保育を展開する上では、難しさを感じる保育者が多いが、その内容については、保育所保育指針が示す保育の質の向上に関する内容と多くが合致した。

また、フィールドワークならびにインタビュー調査からは、日常の様々な場面において、それぞれの子どもにとって、無理のない流れとなるように職員間で話し合いを重ね、共通認識をもちながら進めている様子や、行事などについて、例年の流れをただ踏襲するのではなく、今、そこにいる子どもたちにとっての意味や意義、その進め方等について、職員間で何度も話し合いを重ねながら進めている様子が確認できた。また、インタビューでは、保育士は、子どもを困った子として捉えるのではなく、その子のどのような点が困っているのか、それに対してどのように保育の中で対応したらよいか、ということを考えていることが確認できた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

広瀬由紀・太田俊己 (2009) : 異年齢保育に

携わる保育者の意識に関する調査研究-千葉市の保育者を対象にした質問紙調査に基づいて-. pp69-76. 植草学園大学研究紀要. 第2巻. 査読有

6. 研究組織

(1)研究代表者

広瀬 由紀 (HIROSE YUKI)

植草学園大学・発達教育学部・講師

研究者番号 : 00425357